

修士論文（要旨）

2018年1月

劣等感を踏まえた大学生の適応感の検討
—自己対峙と情緒的巻き込まれに注目して—

指導 井上 直子 教授

心理学研究科
臨床心理学専攻
216J4011
堀部 浩子

Master's Thesis(Abstract)
January 2018

A Study of Subjective Adjustment of Undergraduate Students,
Taking Feelings of Inferiority into Account:
Focusing on Self-Confrontation and Emotional Over-Involvement

Hiroko Horibe

216J4011

Master's Program in Clinical Psychology

Graduate School of Psychology

J.F.Oberlin University

Thesis Supervisor: Naoko Inoue

目次

第1章. 問題の背景と所在	1
第2章. 目的	1
第3章. 方法	1
第4章. 結果および考察	1

引用文献

第1章. 問題の背景と所在

適応感とは適応の状態を表す指標であり、適応の状態をどのように感じるかは個人差があり、適応感を規定するものは個人と環境との主観的關係である(大久保, 2005)。大学生が大学という環境において適応感をもって生活することに貢献することを目指した臨床心理学的研究は、中途退学が社会問題となっている現在、重要であると考えられる。

青年期心性の理解におけるキー概念である劣等感において、「他者に比べて劣っている感情」である劣等感情と、「劣等感が異常に高められた」有害な感情である劣等コンプレックスの区別が必要であり、一概に劣等感が不適応の原因とはいえないと考えられる。

大学生の学校適応感を高めることに貢献する研究として、学校適応感の関連要因としての劣等感を研究するにあたっては、劣等感を抱きながらも大学への適応感を感じることができる者(劣等感情を感じている者)とできない者(劣等コンプレックスを感じている者)の違いに留意する必要があると考えられる。本研究では、この違いをもたらす要因として、自己対峙と情緒的巻き込まれに着目した。

第2章. 目的

劣等感を抱きながらも周囲や大学への適応感を感じることができる者(劣等感情を抱いている者)と、できない者(劣等コンプレックスを抱いている者)の違いは、自己対峙(自己と向き合うこと)と、情緒的巻き込まれ(他者と適切な情緒的距離を保つこと)の程度にあることを仮定する。その上で、劣等感を踏まえた適応感を検討することを目的とする。

第3章. 方法

首都圏の私立大学に通う青年期に相当する18歳～24歳の大学生男女を対象とし、質問紙調査を行った。質問紙の内容は以下のように構成されている。

- (1) 研究協力の依頼と、調査に関する倫理的配慮を含めた説明文
- (2) 学校への適応感尺度 24項目(大久保, 2005)
- (3) 自己対峙尺度 8項目(藤元・吉良, 2014)
- (4) 情緒的巻き込まれ尺度 21項目(鈴木・小川, 2001)
- (5) 社会的劣等感尺度 24項目(安部, 2016)
- (6) 年齢, 性別についての記入欄

第4章. 結果および考察

首都圏私立大学の講義を受講している大学生男女 823名に質問紙を配布し、455名(回収率55.3%)から回答を得た。最終的に男性170名、女性239名、計416名を分析の対象とした(有効回答率91.4%)。分析対象者の平均年齢は20.0歳であった($SD=1.20$)。男女別の平均年齢は、男性20.1歳($SD=1.22$)、女性20.0歳($SD=1.19$)であった。

まず性差については情緒的巻き込まれの「他者感情の取り込み」尺度に現れ、女性は男性よりも

仲の良い友人の悩みを考えるとそのことで頭がいっぱいになり、自己犠牲的な思考や行動をする傾向がある可能性が示唆された。

学校適応感、劣等感、自己対峙、情緒的巻き込まれの関連を明らかにするため、各下位因子の相関係数を算出した結果、男性は、学校適応感尺度の「課題・目標の存在」と情緒的巻き込まれ下位尺度すべてに弱い正の相関が認められた。一方、女性は学校適応感の「居心地の良さの感覚」と情緒的巻き込まれの「他者感情の取り込み」、さらに学校適応感の「課題・目標の存在」と情緒的巻き込まれの「共鳴的情緒反応」にそれぞれ弱い正の相関が認められた。また、情緒的巻き込まれの「共鳴的情緒反応」、「重責感」と劣等感下位尺度すべてに弱い正の相関が認められた。

また、仮説(1)「学校適応感との関連は、劣等感よりも自己対峙の方が強い」と、仮説(2)「学校適応感との関連は、劣等感よりも情緒的巻き込まれの方が強い」をより明確に検証するため、学校適応感、劣等感、自己対峙、情緒的巻き込まれの尺度全体相関係数を男女別に算出した。その結果、男女とも学校適応感と劣等感、および学校適応感と自己対峙の相関は認められず、学校適応感と劣等感、学校適応感と自己対峙の間に関連があるとは言えないことが明らかとなった。したがって男女ともに、仮説(1)「学校適応感との関連は、劣等感よりも自己対峙の方が強い」は支持されなかった。また、男女とも学校適応感と情緒的巻き込まれの相関も認められず、学校適応感と情緒的巻き込まれの間に関連があるとは言えないことが明らかとなった。したがって男女ともに、仮説(2)「学校適応感との関連は、劣等感よりも情緒的巻き込まれの方が強い」は支持されなかった。また、男女共に劣等感と自己対峙に弱い負の相関がみられた。また、女性では劣等感と情緒的巻き込まれに中程度の正の相関がみられ、自己対峙と情緒的巻き込まれに弱い負の相関がみられた。

本研究は、学校適応感と劣等感の2軸を想定し、適H劣H群、適L劣H群、適H劣L群、適L劣L群の4群に分類した。劣等感情を抱いている群、劣等コンプレックスを抱いている群、学校適応感が高く社交的劣等感が低い群、学校適応感と社交的劣等感が共に低い群の4群である。

仮説(3)「適応感得点が高く劣等感得点も高い群は、適応感得点の低く劣等感得点が高い群に比べて自己対峙得点が高い」において、適H劣H群と適L劣H群の間には自己対峙得点に有意な差は見られず、本研究で仮説(3)は支持されなかった。また、情緒的巻き込まれにおいて「共鳴的情緒反応」の下位尺度においてのみ、適H劣H群と適L劣H群の間には有意な差が見られ、仮説(4)「適応感得点が高く劣等感得点も高い群は、適応感得点の低く劣等感得点が高い群に比べて、情緒的巻き込まれ得点が高い」は下位尺度の「共鳴的情緒反応」においてのみ支持された。本研究の結果から、情緒的巻き込まれの下位尺度である「共鳴的情緒反応」は劣等感が高い人のうち適応感が高い人(劣等感情を抱く人)と適応感が低い人(劣等コンプレックスを抱く人)の違いを表す一つの指標となる可能性が示唆された。また、社交的劣等感が高い群が自己対峙が低い結果から、自己の性格の悪さや統率力のなさがあると思っている、または対人関係において自己の欠点を自覚している人は、自分の不快な感情や出来事を直視しない傾向があるが、そのことが大学不適応感に直接影響するわけではない。また、社交的劣等感が高い群が情緒的巻き込まれが高い結果から、自己の性格の悪さや統率力のなさがあると思っている、または対人関係において劣等感を自覚している者は、他者との情緒的関わりが深く、友人の感情や気分を自分の感情として

取り込みやすく、その人のために何かをしたいと思いつつも、それを重荷に感じることもあると言えるだろう。さらに、劣等感情を抱いている人は、劣等コンプレックスを抱いている人に比べ、関わりの深い友人の辛さや悩みを自分の悩みのように感じて内面に取り込む傾向があると言えるだろう。

引用文献

- 安部 芽以 (2016) . 青年期の劣等感と内省への取り組み方および未来展望との関連性
九州大学心理学研究 17, 69-76.
- 伊藤 正哉・阿部 美帆 (2007) . 本来性と自己価値随伴性・自尊感情の変動性とその関
連: 自尊感情の再概念化に関する比較文化的検討のための予備研究 2 日本パーソナリテ
ィ研究大会発表論文集 (16), 156-157.
- 大久保 智生 (2005) . 青年の学校への適応感とその規定要因 一青年用適応感尺度の作
成と学校別の検討一 教育心理学研究 53(3), 307-319.
- 太田 伸幸・甲村和三・児嶋文寿 (2008) . 大学適応感の変化に関する一考察一教職課程
履修性を対象とした縦断調査より 愛知工業大学研究報告 (43), 1-10. ,
- 河合 隼雄(1970). コンプレックス 岩波書店.
- 岸見 一郎 (1998) . 子どもの教育 一光社.
- 向後 千春 (2017) . 幸せな劣等感 一アドラー心理学 実践編一 小学館新書.
- 高坂 康雅 (2008) . 自己の重要領域からみた青年期における劣等感の発達的变化 教育
心理学研究 56(2), 218-229.
- 鋤柄 亮子・吉田 昭久・小熊 均 (1997) . 劣等感情と承認の欲求との関連 茨城大学
教育学部紀要 46, 105-120.
- 鈴木 久美子・小川 俊樹 (2001) . 情緒的巻き込まれ」に関する心理学的研究 I 尺度
の作成 筑波大学心理学研究 23, 237-245.
- 友尻 奈緒美 (2011) . 劣等感とその補償について: 質問紙と T A T を用いた調査より 京
都大学大学院教育学研究科紀要 5, 211 - 224.
- 藤元 慎太郎・吉良 安之 (2014) . 青年期における過剰適応と自尊感情の研究 九州大
学心理 学研究 15, 19-28.
- 潮村 公弘・富岡 愛・船越・理紗 (2013) . 大学への学校適応感の予測因子: 自己概念
と友人関係のあり方からの検討 フェリス女学院大学文学部紀要 48 巻 131-152.
- 中村 真・松田 英子 (2013) . 大学生の学校適応に影響する要因の検討一大学不適応,
大学満足, 就学意欲に着目して一 江戸川大学紀要 (23), 151-160.
- 中村 真・松田 英子 (2014) . 大学への帰属意識が大学不適応に及ぼす影響一帰属意識
の媒介効果における性差および適応感を高める友人関係機能一 江戸川大学紀要 (24),
13-19.
- 中村 真・松田 英子 (2015) . 大学への帰属意識が大学不適応に及ぼす影響(2)一出席率,
G P A を用いた分析一 江戸川大学紀要 25 巻 135-147.
- 野田 俊作 (2017) . 劣等感と人間関係 創元社.
- 林 知美 (2013) . 共感性および自我機能と情緒的巻き込まれの関連 聖徳大学大学院修
士論文要旨集 16 1-2.

米倉 裕希子・三野 善央 (2007) . 簡便なE E (Expressed Emotion,EE) 評価に関する
検討—評価者間信頼性と質問紙によるE E評価の妥当性— 社会学研究 56 117 - 133.